

第39回

ギターは世界をめぐる ～世界の音楽 (5)～

学習のねらい

ギターは、その手軽さと表現力の豊かさから、全世界に普及し愛好される楽器になりました。そのギターの歴史と広がりをたずねてみましょう。あわせて、一つの楽器が世界中に広まっていく間に、その土地固有の音楽と出会い、音楽と楽器がどちらも多様化していく様子を通して、音楽のグローバル化という問題を考えます。



講師
植村幸生

ギターの起源と伝播

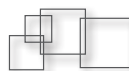
現在のギターは大きくアコースティックギターとエレクトリックギター（電気ギター、またはエレキギターとも）に分かれます。普通にギターといえば前者を指します。ギターの語源はギリシア語の「キタラ」にあるといいますが、楽器としての発祥地は西アジアか地中海沿岸地域ではないかと推測されるにとどまります。

中世のヨーロッパではリュートという弦楽器がたいへん流行しましたが、同じころスペインではビウエラ、ギターラという2つの弦楽器が定着していました。リュートとビウエラが17世紀以降、徐々に廃れた一方、ギターラはスペインに生き残り、現在のクラシックギターの直接の先祖になりました。スペインがギターの本場とされるのはそうした歴史があるからです。

スペインのフラメンコという芸能にはギターが活躍します。フラメンコギターは弦が胴体に近く張られているため、さびたような音色が出せます。また和音を激しく打ちつけるように弾いたり、胴体を直接打ち鳴らすなど、ギターに打楽器としての役割をも与えています。

中南米では16世紀以降、スペインまたはポルトガルからギターが持ち込まれ、さまざまな民族に受け入れられた結果、各地でギターの変種ともいえる独特の楽器が生み出されました。たとえばベネズエラでは、クアトロという4弦の小型ギターがあり、軽快なリズムを奏でます。

ギターは19世紀に北米大陸およびハワイに伝わって、カントリー、ブルース、ジャズ、ハワイアンなどの新しい音楽に応用されると同時に、ギター自体も変化をみせました。その変化の一例がスチールギターです（ハワイアン・ギターということもあります）。



スチールギターは、現在は琴のような細長い形ですが、そもそもは通常のアコースティックギターを膝の上に置いて演奏しました。この楽器は、指にはめた小さいパイプで弦を押さえて演奏します。このパイプを左右に揺らし音をスライドさせることができます。この弾き方がどこで生まれたのか、はっきりしませんが、本来スライド音を出すには不向きなギターから、まったく新しいサウンドが作り出されました。

電気(エレクトリック)ギターの発明

1930年代、エレクトリックギターが発明されました。その仕組みは、ピックアップという部品が弦の振動を拾い、それを電氣的に増幅するというものです。そのため、原理的にはエレクトリックギターは共鳴のための胴が必要ありません。

エレクトリックギターは、アコースティックギターでは不可能な大音量が出せるだけでなく、押さえた指で弦を引っ張るなどの演奏テクニックや、エフェクターという装置を用いて、さまざまな表現を生み出すことができます。さらに、演奏者の姿勢もアコースティックギターよりずっと自由になり、演奏中に派手なアクションを見せることもできます。ロックミュージックのスタイルは、こうしたエレクトリックギターならではの性能を駆使して、はじめて成立するものといえます。

グローバル化とローカル化

西アジアのシリアには、独自の改良を施されたエレクトリックギターがあります。西アジアの音楽では、半音よりも狭い音程（微分音程）を普通に使うため、それがたやすく出せるようエレクトリックギターが改造されているのです。

日本にはいつギターが入ってきたのでしょうか。戦国時代、キリスト教の宣教師がギターラという楽器を教えたと記録されています。

しかし、ギターが日本に再び輸入され定着したのは、明治時代の後期ごろです。日本の音楽教育が、なぜかギターに対して積極的ではなかったにもかかわらず、日本にギターが広く普及した背景には、日本人がそれまで三味線に長く親しんできたことが関係すると私はみています。

戦前・戦後にかけて日本の流行歌をリードした古賀政男^{こがまさお}という作曲家がいます。彼の曲にはギターが非常に似つかわしいことで知られます。彼の代表作「影を慕いて」のイントロ（前奏）はクラシックギターのスタイルの上に、三味線を思わせる、はじく音の繊細さを加えています。

こうしてギターの広がりを見ると、一つの楽器が世界中に広まっていくにつれて音楽がどんどん多様になっていく様子がわかります。

最近、グローバル化（グローバリゼーション）という言葉をよくききます。制度や生活様式、考え方などが地球規模に広がっていくことを指します。ギターの世界的な広がりもグローバル化の一例といえます。しかし、ハワイ、シリア、日本に独特のギター音楽が生まれたように、

グローバル化をきっかけに、むしろその土地にあったローカルな文化が作り出されることがあるのです。

注意したいのは、このようにグローバルな要素を取り込みながら、自分たちのローカルスタイルを築き上げていく背景には、「自分たちの音楽」をしたいという強い主体的な欲求が必ずあるということです。それゆえ、グローバル化の時代に私たちが主体的に生きていくためのヒントを、ギターの世界的な広がりという現象から読みとることができると思います。

ワードファイル

リュート : 丸みをおびた胴体を持ち、弦をはじいてひく楽器。中世からバロック時代のヨーロッパで愛好された。歴史的に琵琶と類縁関係にある。

フラメンコ : スペイン南部アンダルシア地方で発展した、歌・踊り・ギターで演じられる芸能。情熱的な表現が特色。

微分音程 : 半音よりも狭い音程 (4分の1音、9分の1音など)、およびその組み合わせで作られる音程。西アジアの音楽で頻繁に用いられる。

古賀政男 (1904～1978)

昭和期の作曲家。数多くの国民的ヒット曲を作曲し、ギター、マンドリン、大正琴の演奏でも知られた。没後に国民栄誉賞を授与された。